

4 栽培技術

1) 適地

疎植栽培で、収量が低下する要因として穂数不足があげられる。したがって、疎植栽培の適用地域は、穂数が十分確保できる暖地の平坦地である。また、土壌がやせている圃場、減水深が20mm以上の圃場、水温が上がらない圃場では不適である。

2) 適品種および移植時期

疎植栽培に適する品種と移植時期は、次のとおりである。極早生品種のコシヒカリとあきたこまちは4～5月中旬までの移植、早生品種のこいごころは6月中旬までの移植、中生品種のヒノヒカリと愛のゆめは6月中旬までの移植とする(表4)。

表4 作型別品種適応性(収量を慣行栽培と比較)

品種名	4月		5月		6月		
	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
極早生 あきたこまち							
極早生 コシヒカリ							
早生 こいごころ							
中生 ヒノヒカリ							

は11.1株/m²(株間30cm)で、慣行栽培並の収量確保が可能

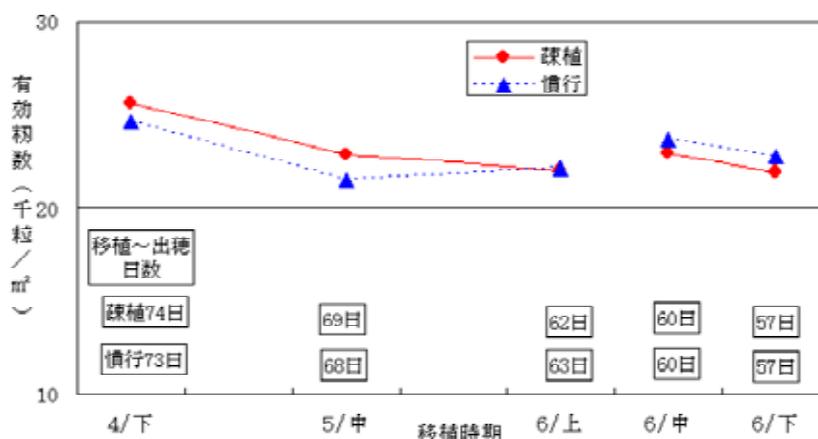


図5 移植時期別有効穂数と移植から出穂までの日数(あきたこまち)
注)4月下旬～6月上旬は1997～2001年の平均値、6月中下旬は2002～2003年の平均値
有効穂数は千粒/m²で、種数×1種穂数×登熟歩合

あきたこまちの短期栽培(6月移植)では、生育量不足で収量が低下する。